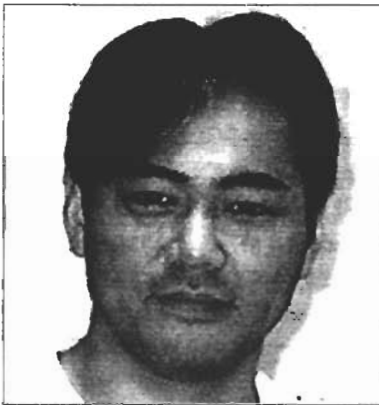


平成13年4月27日発行

上智大学英語学科同窓会  
東京都千代田区紀尾井町7-1  
上智大学英語学科事務室気付**Sophia English Language Department Alumni Association****On finishing my first year of teaching at Sophia**

英語学科講師 和泉伸一

A year has passed since I started teaching at Sophia. I came back to Japan last year from several years of living in the United States to join the faculty of the Sophia English Language Department. The past year has been full of challenges. One of the biggest challenges, however, was not related to Sophia University. It was to get used to my new life back in Japan. After so many years abroad, I found the re-entry phase of culture shock quite poignant. This was compounded by the fact that Japan has changed since I left and I have never lived in a city as big as Tokyo before (Washington DC, where I spent the last five years, is not as big and as crowded as Tokyo!).

At Sophia, I teach English Composition, English Reading, General English for other language majors, English Linguistics, and Second Language Acquisition, the last of which is my specialty. It has been exciting to teach Sophia students. I was delighted to learn that I really didn't have any serious problems using only English in all of my classes. Students are generally very good at comprehending English, although their productive skills may often lag behind their receptive skills, which is common in both first and second language acquisition. One of the challenges I faced was that in many of my classes there was a mixture of the so-called 'jun-Japa' ('pure Japanese') students and 'kikokushijo' (returnee) students. It is an interesting combination in the sense that different students bring their own unique perspectives to many of the social and educational issues we discuss in class. This definitely adds to the diversity of the class and enhances its environment for reciprocal learning. Yet, it can also be a potentially discouraging factor for some students who may not be as fluent in English as other students. Some students, thus, feel quite self-conscious of their current linguistic disadvantages and feel hesitant to participate in class. I consider this to be a challenge for me, the teacher, to promote a class atmosphere of inclusion and support the participation of everyone. Overall, though, my impression of teaching at Sophia is a very positive one: The more I challenge myself to meet the students' expectations, the greater the reward I get. It is an exciting environment for me because students challenge me as I challenge them.

As a little introduction of my background, I was born and raised in Odawara, Japan. As a native 'Odawaranian,' I learned English as a foreign language just like other jun-Japa students. Having struggled to learn English as a foreign language as a jun-Japa student, I had long wondered how I could acquire English in the best possible way. I began to find some answers to this question when I first went to the US as a 19 year-old. This is when I began to use and learn English for communication and real, functional purposes, rather than as an object of study. These experiences made me rethink my prior language learning experiences. My initial plan was to spend only a few years studying (political science, at that time) in Oregon and return to Japan. However, when I returned to Japan, I taught English and became fascinated with how people learn and teach second languages. This interest brought me back to the US to pursue a career in the field of second/foreign language learning and education. This time, I went to Illinois to study Applied Linguistics for my master's degree. Upon getting my MA, I decided to further pursue my graduate studies at Georgetown University in Washington DC, where I earned my Ph.D. in Applied Linguistics.

My present goals are to refine and revise my classes. I feel that I have barely begun to get a handle on what to expect and what may be expected of me. I also look forward to familiarizing myself much more this year with the many activities of the department and the university. I am looking forward to another challenging and exciting year ahead of me.

# “怒涛の3年間”

佐古 建夫(1983年(昭和58年)卒)



1998年3月1日、当社(有限会社サッコグラフィクス)が営業を開始した。12年半勤めた中規模の印刷会社(家内の父親が経営。以下C社)を退職し、独り独立しての新たなスタートだった。

私が独立・起業したのは、今はやりの「インターネットでSOHOしよう!」といった理由からではない。それまでの会社を辞めなければ、自分と自分の家族の人生がダメになる、と家内共々判断し、決断したのがきっかけだった。つまり、「辞める事まずありき」だった。この後、自分自身で起業することを決め、営業部長としての仕事の申し送りと並行して会社設立の法的手続きを一人で行い、義理の父親との養子縁組を解消し(つまり、私の相続権を自ら放棄し)、4ヶ月後に開業までこぎつけた。

開業してからの一年余は、C社において私が新規開拓したクライアント4社を引き継ぎ、なんとか売上は確保していた。しかし、営業活動をそれほどせずに半自動的に受注することができる「定期物」がまったくなかったため、売上額は安定しなかった。また、私自身が「営業」として働くのみで、全ての製作工程を外注していたため、利幅は少なく、少しずつ資本金を食いつぶして行く状態だった。

家内が、FAXを用いた中学生向け英語添削と、小人数の個人教授をやっていたため、少額ながら「コストゼロの日銭」が入っていた(現在も継続中)のが、予想以上に助かった。

開業した年の秋頃のある日、昼食を一緒に食べていた家内が「話しがある」と言う。「出来たみたい。」私は、たじろいだ。会社は作ったばかり。中学受験を控えた長男と同じく小学生の次男を抱え、3人目の子供は経済面、家内の健康面、共に許容しうるものかどうか。しかし家内は「生みたい」と言う。私も同意した。

開業2年目の5月、長女が誕生した。その頃から私は、営業のみの仕事スタイルを改め、自分自身でDTP作業を行って、少しずつ外注コストを削減していった。仕事を受注してからソフトを学習し、学習しながらデータを作ってゆく、泥縄的な作業だったが、「支払いが発生しない」ことがこんなにも有りがたいことかと今更ながら痛感した。2年目は、ほんの少額ながらも黒字決算で終える事が出来た。

3年目。長男は私立中学に通い、次男は塾へ。毎朝、長女と家内を保育園へ送り届け、神田錦町の会社でDTP作業を続ける毎日。学生時代の友人たちから、あるいは、その紹介で仕事も増え始め、徹夜することも何度か経験した。開業当初より、私と私の会社を支えつづけてくれている印刷業界の仲間たちと飲んで語り合うのが実に楽しい。念願だった「定期物」も2本抱える事が出来、僅かながら利益も上昇した。

そして、今年の3月1日。開業3周年を迎え、4年目に入る。次男は4月から私の母校の中学に進学する事となり、うれしい反面多額の物入り。長男は急に背丈が伸び始め、家内の身長を大きく超えた。長女はゴールデンウィーク過ぎに満2歳。親バカ承知の上で言わせて頂ければ、「驚異的に可愛い」。

人生、何か事が起こる(あるいは起こす)と、立て続けにいろいろな事が連鎖的に起きてくるようだ。矢のように過ぎ去って行った3年余の年月だが、現在、家内とよくこう話す。

「今までの人生で今が一番幸せだと思う。」

「うん、そう思う。」

# “五輪取材の切り札”

斉藤稚子(1996年(平成8年)卒)



五輪取材のため準備したもの。宿泊施設、車、会場内仮設オフィス、あらゆる器材、インスタントの日本食、そして、ピン。

1999年7月、朝日新聞社シドニー支局で運動記者の助手の仕事を始め、オリンピックおよびパラリンピック取材団受け入れ準備の手伝いもすることになりました。大会をカバーするために現地入りした取材陣は総勢40人ほど。それだけの大所帯を支える物資の種類・量の多さは予想できましたが、朝日オリジナルのデザインのピンを大量に持ち込むと聞いたときには、意外に思ったものです。

しかし、五輪が始まって納得。国を問わず、各社とも自社ピンを大量に用意しているのです。各方面に取材をするとき、大会ボランティアの人たちをお願いをするとき、ピンを渡すと、相手も機嫌良く応えてくれますし、初対面の各国メディアの人とも、名刺交換ならぬピン交換で親睦を深められます。そして、ピンには社名も入っていますから、これをばらまくこと即ち宣伝活動でもあるわけです。

ボランティアの間では、「どれだけ多くの数のピンを集められるか」というコンテストまであったらしく、各社ブースを練り歩き、ピン集めに奔走する輩も出る始末。そうして手にした戦利品をシャツの襟に、あるいは首からIDパスを下げるための紐に、びっちり隙間なく留めていくのが流行っていました。

パラリンピックも大会後半に入ったある日、とある取材で知り合ったインターネット放送会社の男性がやってきました。同僚がつけていた朝日のピンが気に入り、自分もぜひ一つ欲しい、と。もらったピンを眺め、「これ、ハローキティのデザインなんでしょ？すごくかわいいよね！」と、興奮気味に話すのです。

朝日のピンは、招き猫をあしらった渋いもので、キティちゃんとは似ても似つかぬ代物でしたが、あまりにも嬉しそうな表情の彼に、「違うよ、招き猫だよ」とは言えませんでした…。

## 卒業生短信

3月上旬までに事務局に届いたお便りを掲載いたします。(本文中では敬称を略しております。ご了承ください。)

また、皆様からのお便りを募集しております。ご自身の近況、自著の宣伝等、なんでも結構です。同封の葉書に書いて、同窓会事務局までお送りください。

■1996年から、イリノイ大学シカゴ校 School of Public Health の助教授となり、老年学の研究、授業を担当しています。昨年7月に結婚し、生活が楽しくなりました。

村松 尚子 (昭和58年卒)

■オーストラリアのハイスクールで子供達に日本語を教えています。ややもするとその世界にどっぷりと浸ってしまって、外の大きな世界が見えなくなってしまいます。そんな時、この会報はいい刺激になります。

野本 晴子 (平成元年卒)

■昨年5月のオールソフィアンの集いで十数年振りに再開した喜びも束の間、9月末に夫の任地である北京に出発しました。中学生の子供二人を実家に預けているので、月に1回帰国しています。氷点下の北京とせいぜい気温一ケタの東京との往復は身にこたえますが、これも通るべき道と覚悟しています。

宮家 (旧姓 千葉) みどり (昭和54年卒)

■同窓生のみなさま、お元気ですか。昭和63年卒の御子柴(旧姓 伊藤)理佐です。今回はお知らせを兼ねてお便りしました。

私は3年前に本校(上智)で吉田研作先生がご講義された「現代英語教育の諸問題」という公開学習講座をとりました。そこで偶然、昭和60年卒で現在大修館書店の編集者をされている須藤彰也さんとお会いしました。そして須藤さんからご提案された企画により、2001年2月に私が書きました「英語ははやくから始めよう 一早期英語教育の教室から」が大修館書店より出版刊行予定となります。まだまだキャリアとしては未熟な私ですが、吉田先生を始めとする多くの方々のご協力を頂くことができ、子供たちを通して感じたことや考えたことを分かち合えたらと思っております。たくさんのみなさまにお手に取っていただけたらと願っております。

御子柴 (旧姓 伊藤) 理佐 (昭和63年卒)

■2000年5月に宜蘭で介護用品の店“みるて”をオープンしました。いろいろな物を扱っています(グループ企業が建築なので住宅改修も)。商品情報等ありましたら、ご連絡をお願いします。(輸入品も扱っています。)

中田 (旧姓 佐々木) 久美子 (昭和52年卒)

■現在NHKラジオ第1で毎週土曜日午前9時45分から55分まで、生放送の「あんな国こんな街」のコーディネーターと通訳をしています。5年目になりますが、この番組をまとめて、「That country This town — learning

English from interviews」という本を弓プレスから、大学生用英語教材として出版しました。コミュニケーション・イングリッシュの最適な学習書です。もし見本が必要でしたら、是非おっしゃってください。1月には「@いうまにe-mail」という英語でいかに短くメールを送るかというテーマの本を出版します。これは一般書店に並びますので、よろしく願います。

片野 (旧姓 金山) 順子 (昭和52年卒)

■2才と1才の男子の母。2000年4月より都立高校教諭となり、都立国際高校で英語と国際理解科目を受け持っています。在京外国人生徒、帰国生や留学生もいて、パワーあふれる生徒の揃った、特色のあるカリキュラムが自慢の高校です。英語学科卒業生の皆さんのご子弟も是非どうぞ！

Randstrom (旧姓 中川) 弘子 (昭和61年卒)

■2000年4月より、イタリアの精密機械メーカーの日本代表事務所働いています。今まではグルメとファッションといったイメージを抱いていたイタリア、まさかビジネスで携わるとは。夏には本社に研修で行かせていただき、自由に生き活きと働いている本社の人々に会えて、とても良い体験をすることができました。しかしながら、日本の会社とビジネスをするには、あまりに時間やお金の感覚がかけ離れており(早くも私はイタリア側の感覚に慣れつつありますが)、ハラハラすることもしばしばです。毎日が文化交流(というよりビジネス交流)のはざまであり、大変ですがやりがいを感じて働いています。

宮本 順子 (平成12年卒)

■卒業以来、映画の字幕翻訳に携わっています。

主な作品は「L.A.コンフィデンシャル」「交渉人」「マトリックス」、そして2000年には「60セカンズ」「U-571」「スペース・カウボーイ」などがあります。

1984年に結婚した妻ひろみ(昭和56年英語学科卒)は手相家として、国内外で幅広く活躍しています。オールソフィアンの集いなど催し物の際には是非お声をかけてください。

林 完治 (昭和58年卒)

■マイレージと引越しの疲れがたまり、仕事人間のハズに3匹の猫を預け、何回目かの大好きなイギリス一人旅を決行。毎日到着した所で宿を探し、荷物を置いての観光は、のんびり気ままで、サビついた私の英語も気にならない。中部イングランドは、30年振りの大洪水で、どこも水浸し。予定を変更し、バースを皮切りに、ブリストル、カーディフ、ソールズベリー、ブラ

イトン等南部まわり。レディングでは、10月中にcloseされたマナーハウスガーデンを案内してもらったり、かわいいB&Bで小学生の娘さんの宿題を手伝ったりしながら、最後の4、5日を見納めのロンドンにして、見落としのないよう種々のトラベルカードをフルに利用。折りしもテートギャラリーでは、ウィリアム・ブレイク展の初日で、テレビ局が入っており、宿に帰るとニュースでなんと、私の鑑賞姿がon airされているではありませんか。これで英国のテレビに出る(?)のは2回目になった(1回目は10年前、ウェントワースゴルフ場17番ホールで、パレストロスのショットを最前列で見ているところ)と、ミーハー気分で一人ほくそ笑む。ある安宿では、ダニの大群に襲われるというおまけもついたが、11月13日(誕生日)、ミレニアム還暦ばあさんの一人旅は無事上がり。

“還暦の身の置きどころ木の実踏む” 由美子  
遠山(旧姓 高橋) 由美子(昭和38年卒)

■在学中に交換留学のプログラムでUniversity of Wisconsin, Eau Claireに2 semesters在籍しました。昨夏、当時お世話になったhost familyを訪問しました。ものの考え方がちょうど固まりかけた頃、それまで知っていたのとはまた違う価値観で私を大いに刺激してくれたhost motherとの再会は、彼女の健康がこのところ思わしくなかったこともあり、感無量でした。夫や3人の子供とキャンパスを散歩したり、host sister一家5人と、host parentsとの総勢12名で大ディナーをしたり、22年前には夢にも考えられなかった滞在でした。UWECとの交換留学はずいぶん前に無くなってしまったとのことで残念ですが、たった10か月でも、あの美しく静かな街で、素晴らしい人達と過ごせた幸せを今更ながらありがたく感じます。

酒井(旧姓 西本) 啓子(昭和55年卒)

■昨年は体調が悪くあまり元気がありませんでしたが、新世紀の幕開けで何か良いことがありそうな予感があります。目下、ボランティアに興味に精々頑張りたいと思っています。

妻の亡くなった父(戦死)の墓参りを兼ねて、沖縄へでも妻と義母と一緒にいこうかと思っている今日この頃です。機会があればESSのOB会にも出席し、皆の懐かしい顔が見たいものです。

今年は何かボランティアの外に自営業でも立ち上げようか(輸出入?)なども考えています。まだまだ現役で頑張ろうと思案中です。

佐藤 寿(昭和38年卒)

■前号(No.31)で紹介していただいたピアノコンサートの日程です。お気軽にお越しください。

・ Classical Anthology 2001

7月7日(土) 新宿区角筈区民ホール(初台・都庁前駅)  
ピアノ教師によるピアノとフルートのコンサートです。

・ Fantasia Concert

8月26日(日) 江東区ティアラこうとう(住吉駅)

社会人ピアノサークルによるコンサートです。

時間は一か月前以降にお問い合わせください。

Tel.03-3695-8860

北川(旧姓 足利) 香里(平成3年卒)

## オール・ソフィアンズ・デーで 会いましょう



2001年度SELDAA総会&  
懇親会のお知らせ



2001年度総会を今年もオール・ソフィアンズ・デーに合わせて、5月27日(日)に開催します。

総会では、活動報告、議案の承認の他、SELDAAの今後の活動について、多くの方のご意見を伺いたいと思います。総会終了後には、ささやかながら親睦パーティーを予定しております。会費は無料。是非皆様お誘い合わせの上お越しください。久しぶりの母校で、楽しいひとときを過ごしましょう。

2001年度SELDAA総会  
および懇親会

日時：2001年5月27日(日)  
12:00～14:00

場所：上智大学1号館201教室



SELDAA ホームページ

<http://www2u.biglobe.ne.jp/~seldaa/>

## SELDAA セミナー

SELDAA セミナーは、  
毎月一回、水曜日 10:30～12:00、  
ソフィアーズ・クラブで開催されております。  
今回は、昨年度後半に行われた  
セミナーについて、出席された方に  
ご報告いただきました。

# SELDAA セミナー

### これまでに開催されたセミナー

#### ●2000年10月25日(水)

江畑 謙介氏(軍事問題解説者)

#### 『IT革命と21世紀の戦争』

現代の社会におけるIT革命は、あらゆる分野に予想以上の変化をもたらしています。そのひとつが、インフォメーション・ウォーフェアです。つまり、インターネットの利用で個人ですら膨大な情報量を持つことが可能になり、ネットによって簡単に国境や時差を超えて連携し、あるいは個人で国家の重要なインフラである行政、金融、通信、エネルギー、交通などにテロ攻撃を仕掛けることも可能になってしまいました。これまでの常識を超えた日常への対応の必要性などをお話いただきました。

情報依存社会がいかにもろいか、そして正しい情報を選択できる判断力を持つことが、いかに大切であるかなど考えさせられた興味深いお話でした。

阿部 淑子(昭和53年卒)

#### ●2000年11月22日(水)

Br. Michael Milward(上智大学外国語学部英語学科教授)

#### 『Royal Divorce Today』

英国では過去に、国王であるよりもまず“一人の人間”でありたいと願って放蕩生活や離婚をしたり、また、未亡人との結婚を選び王位を捨てた国王がいました。最近のチャールズ皇太子と故ダイアナ元妃の離婚の背景には、エリザベス女王の意向に従うことが最も優先されて自己のアイデンティティが

持てないチャールズの姿があります。エリート教育を受けてひ弱なチャールズとは反対に、たくましく育てられているウィリアム王子に次の王位が行く可能性もあると取り沙汰されていますが、その場合には、チャールズがどのような職につくかが問題となります(日本の皇室と違い、イギリスでは職業につかなければなりません)。どうなるかはまだわかりませんが世論に耳を傾けて改革に積極的に取り組んでいる英王室には明るい未来があるのではないかと思います。

川端 啓子(昭和43年卒)

#### ●2000年12月13日(水)

吉田 研作氏(上智大学外国語学部英語学科教授  
一般外国語教育センター長)

#### 『これからの日本の英語教育 (Japan's English Education in the 21st century)』

Average TOEFL scores among the Japanese are low in comparison with South Koreans, Chinese, and Taiwanese. But the gap of points with other Asians narrowed when the test takers are highly motivated. Professor Yoshida suggested that the lack of moral courage among the Japanese youth may be partially due to poor communication skills. Citing specific examples, he also talked about changes in English education and college entrance procedures. He stressed the importance of communicative motivation in language learning. The

## SELDAA セミナー 参加者の声

SELDAA セミナーに参加しての感想を、数名の方に寄せていただきました。

いつもお世話役の皆様、ご苦労様です。テーマが毎月違っていることが魅力的です。日頃考え感じているのとは違う視点を示され、私の生活にはとても大切な機会と思っています。

—— 小野 悦子(昭和44年卒)

月一回、いろいろな分野のお話が伺えるので、楽しみにしています。もう10年以上も続いているので、できるだけ長く、こうした集まりが続いてほしいと思います。

—— 座間 由美子(昭和43年卒)

久しぶりに出席させて頂いて、日常の慌しさの中に考える事をやめている自分に気がつき、反省いたしました。またこうした、ゆったりと考える時間をとりたいと思います。

—— 山下 景子(昭和41年卒)

講師の先生方がそれぞれの分野で一流の方々に、セミナーに来るたびに、非日常的刺激を受けて帰ります。サイバーテロのお話、インドネシアの内乱のことなど、お話をうかがった後は、新聞を読んでもその方面に興味湧きます。

—— 下田 晴子(昭和41年卒)

realms of language and communication evolve gradually from within oneself to shared language use with a larger group based on socio-cultural factors.

Professor Yoshida energetically conducted the lecture in English, kindly answered our questions and joined us for the luncheon that followed. The lecture gave food for thought to those who are involved in English education as well as to a homemaker like myself who struggles communicating with a toddler every day.

大石 りか (平成元年卒)

### ●2001年1月24日(水)

Fr. Donal Doyle (上智大学外国語学部英語学科教授)

#### 『Irish Folklore』



Masculine Protest と The Story of the Widow's Son というショートストーリーを、Fr. Doyle が臨場感たっぷりに朗読してくださいました。特に、後者のストーリーは、2つの結末が用意されていて、一人息子を女手一つで大変な苦勞をして育てている貧しい未亡人の話。生活の糧である大切なめんどりを避けようとして、息子の自転車が急な坂道で突っ込んでしまい、大事な一人息子が死んでしまうという結末と、息子は無事だがめんどりを殺してしまい、それを未亡人にきつく責められたことで、結局は学力優秀だった息子が家を出て、漁師となってめんどりの代償としてお金を母に送り続けるという、どちらにしても大切な一人息子を失ってしまうというもの。自己犠牲も度が過ぎるとは周囲の人を不幸にするということ、人生の目的と手段を誤ってはいけないということなど、深く考えさせられる内容でした。

厳冬の中、12名と少ない出席者ではありましたが、Fr. Doyle より、アイルランドに戻られた折に撮られた、道を行く一頭のロバのモノクロ写真をカードにした素敵なプレゼントまで頂き、楽しく有意義な90分でした。

石井 真由美 (昭和53年卒)

### ●2001年2月28日(水)

村井 吉敬氏 (上智大学外国語学部アジア文化研究室教授)

#### 『インドネシアの海辺を歩いて』

前回の村井先生のエピソードが面白かったので、今回も参加しました。カツオのタタキがインドネシアの工場で作られていると聞いてびっくり。便利さばかりを追求せずに身近なところから環境問題を考えていかなければいけないと考えさせられました。

岸本 郁江 (昭和43年卒)

他の大学のシンポジウムでいかにも楽しそうにインドネシアと日本の交易のお話をうかがった頃を懐かしく思います。今回の、開発の波から現地の人々の暮らしを守ろうというエコ・ツーリズムのお話、うまくいくと良いと思います。

熊野 順子 (昭和46年卒)

### ●2001年3月14日(水)

岩橋 悟志氏

#### 『一期一会 一字幕翻訳のお話』

字幕翻訳の手順から、その作業の特徴や字数制限などの規則、プロならではのテクニックなどを、「ファイトクラブ」や「ハートオブウーマン」などのヒット作品や実際に岩橋さんが手がけられた作品を見ながら、説明していただきました。例えば、Thank you や You're welcome などの簡単な英語表現に対しても、その話し手のキャラクターや、その場の雰囲気や物語の流れなどを考慮すると、さまざまな日本語訳になり、その意味では、英語力20%に対して、日本語力80%が必要と言われるほど、日本語の引き出しをたくさん持っていることが、字幕翻訳には重要とのことでした。

今までの SELDAA セミナーの講師の中では、一番お若い岩橋さん、講演なさるのは初めてなので、と謙遜されていましたが、こんなに質問が出た講義も珍しいとコメントが出たほど、字幕翻訳の舞台裏のお話に引き込まれたひとときでした。

木村 和美 (昭和49年卒)

## SELDA A セミナー 今後の予定

2001年 4月25日(水)

後藤 徹也氏 (理学博士/日本エクス・  
クロン株式会社 代表取締役社長)  
『赤い火と青い火——原子力とは』

2001年 5月23日(水)

木村 和美氏 (東京外国語大学講師  
昭和49年英語学科卒)  
『How to Write a Logical Essay in  
English : From the Point of View  
of Contrastive Rhetoric』

2001年 6月27日(水)

安西 祐一郎氏 (慶應義塾大学理工学部部長)  
『コンピュータは心をもつか?』

2001年 7月11日(水)

寺田 朗子氏 (国境なき医師団日本会長)  
『国境なき医師団とは?』

場所：ソフィアーズ・クラブ

時間：10:30～12:00

会費：3,000円/年  
(英語学科卒業生)

5,000円/年  
(英語学科以外)

500円/1回毎

\*事前の予約は不要です。  
当日直接会場にお越しください。

## ■異動通知にご協力ください

ご住所、勤務先などに変更があった方、名簿の誤りを訂正される方、お名前の正しい読み方を知らせてくださる方は、英語学科同窓会事務局またはソフィア会事務局またはソフィア会事務局までお知らせください。また、住所不明の方が多数いらっしゃいます。消息をご存知の方、情報をお寄せください。

「※2001年3月末に新しい名簿を発行しました。終身会員および2000年度分の会費を納めている方のみ発送しました。」

## ■SELDAAより、募集とお知らせ

◆SELDAAでは、皆様よりこの会報に載せる記事を募集しています。近況や最近感じたことなど、何でも結構です。原稿に写真を添えて、あるいは、同封の葉書にご記入の上、お送りください。

◆この同窓会の常任委員として手伝ってくださる方を募集しております。ボランティアで私達と一緒に会を盛り上げてくださる方、ご連絡お待ちしております。

上記に関するご応募・お問い合わせは、お気軽にどうぞ。

連絡先: 〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 英語学科事務室気付 上智大学英語学科同窓会事務局

TEL.03-3238-3719 FAX.03-3238-3910

E-mail:seldaa@mve.biglobe.ne.jp

## ■会費納入のお知らせ

本会の諸活動は、卒業生の皆様からの会費の納入によって賄われています。同窓会活動のより一層の充実と活性化を図るために、ぜひ会費をお支払い下さいますようお願い申し上げます。

会費の支払い方法には、毎年会費を支払う「一般会員」と、一括払いの「終身会員」の2通りがあります。初めて会費をお支払いになる際には入会金もあわせてお支払い願います。金額は下記の通りです。同封の振替用紙にて最寄りの郵便局または銀行よりお支払いください。その際、ソフィア会会員番号を必ずご記入ください。

(なお、振込用紙は、発送の都合上すべての方に送っておりますので、ご了承ください。)

**入会金 : 1,000円**

**一般会員 : 年会費 2,000円 (できれば3年分まとめて)**

**終身会員 : 一括払い 20,000円**

### 《あなたの会費納入状況》

封筒の宛名ラベルの右上をご覧ください。

◆「S」のスタンプが押してあるのは、「終身会員」であることを示しています。

◆「未」のスタンプが押してあるのは、今年度の会費が未納になっていることを示します。

5,000人を超える同窓会会員の会費納入状況のチェックには多大な手間と時間がかかります。チェックの時期と納入の時期が重なったなどのために行き違いがあった場合は何卒ご容赦ください。

## ◆SELDAA 常任委員 (平成13年4月現在)◆

■名誉会長/笠島 準一 (昭和48年卒)

■女性セミナー/安西 徳子 (昭和49年卒)

■会長/蔵田 實(昭和48年卒)

■常任委員/石川 雅弥 (昭和40年卒) 斎藤 敬子 (昭和48年卒)

■副会長・事務局長/大日方聖信 (昭和62年卒)

相馬 晶夫 (昭和54年卒) 増田 光 (昭和59年卒)

■副会長/池沢なるみ(昭和48年卒)

東郷 公德 (昭和62年卒)

■会計/内藤恭子(昭和55年卒)

■監査/井坂由美子 (昭和47年卒) 岩村玲子(昭和49年卒)

寺北ゆかり(昭和61年卒)

■会報/佐藤誠一郎 (昭和53年卒)

《編集後記》 ●新緑の季節となりましたが、今年も年2回発刊のニュース・レターをよろしく願います。(S.S.)

●21世紀最初の会報をお届けします。皆様の親睦にお役に立てれば幸いです。(M)